

# 経済学史の意義とその方法 (二)

上野俊樹

## △目次▽

はじめに

一 認識の発展の動力について

1 経験的事実と既知の認識との矛盾

2 松村一人氏の認識の発展の動力の理解について

(イ) 松村氏の所説を検討する意義について

(ロ) 分析の不十分さにより生じる認識上の矛盾

(ハ) 認識過程で必然的におちいる認識上の矛盾

(ニ) 松村氏のヘーゲル論理学の批判について——有、無、成のカテゴリーの移行について

(以上、「立命館経済学」第二七卷第一号)

(ホ) 松村氏のヘーゲル論理学の批判について——成から定有へのカテゴリーの移行について

3 松村説の経済学への適用——富森虔児氏の経済学の方法

(イ) 論理的矛盾の三形態の混同

(ロ) 単純な分析的方法における認識の発展の動力について

(ハ) 弁証法的方法における認識の発展の動力について(未完)

# 一 認識の発展の動力について

## 2 松村一人氏の認識の発展の動力の理解について

(注) 松村氏のヘーゲル論理学の批判について——成から定有へのカテゴリー移行について

松村氏はそのヘーゲルの絶対的方法にたいする批判の不十分性から、ヘーゲルの成から定有への移行についての説明を再び次のように不正確に解釈される。

「この成から定有への移行には、明らかに現実的な意味があり、それは一つの重要な現実の法則をあらわしている。そしてヘーゲル自身その現実的な意味をはっきり見ていることは、『われわれの表象のうちにも、成があればそこから或るものが生じてくるということ、したがって成は一つの成果をもつということが含まれている』（ヘーゲル『小論理学』八九補遺―筆者）というその言葉によっても知ることができる。すなわちここに見いだされる現実的な法則は、あらゆる特定の存在は生成したものであるということである」（『ヘーゲルの論理学』、八八一―八九ページ）。

「成から定有の移行においてわれわれは、特定の存在はすべて生成したものであることを教えられた。これは非常に重要なことである。われわれはこの法則を複雑な規定をもった存在についてののみならず、非常に単純な分子やアトムや、さらにアトムを構成するいくつかの微粒子についても確認することができる。そしてわれわれは

（経済学史の意義とその方法）（上野）

これによってあらゆる現存するものの理解は、その生成の理解まで含めてはじめて完全になることを知るものである」（傍点は筆者——同前、一〇一ページ）。

この二つの引用文は、とりわけあとの方の引用文の傍点部分に明瞭に示されているように、ヘーゲルの絶対的方法の肯定的側面を、すなわち、科学的認識は事柄を萌芽から発生的に展開することをその不可欠の側面としておこなわれなければ不十分であると考えるヘーゲルの思想を正しくとりだしている。この点がまずこの二つの引用文にみられる松村氏のヘーゲル理解の肯定的側面である。

しかし、問題はヘーゲルの絶対的方法の根本的欠陥である主観の過程と客観の過程を同一とみる考え方、認識の歩みと歴史の歩みを同一とみる考え方にたいして松村氏がどう考えているかである。

ヘーゲルは成から定有の移行について、次のようにいう。

「成は有から無への、また無から有への消失であり、一般に有と無との消失である。けれども、或は同時に両者の区別にもとづいている。それゆえに、成はたがいに対峙するようなものを自分のなかに統一しているものであるから、自分自身のなかに自己矛盾をもっている。しかし、このような統一は自分を破壊してしまう」（武市健人訳、ヘーゲル『大論理学』上巻の一、一一三—一二四ページ）。

この文章の意味については、『見田石介ヘーゲル大論理学研究』第一巻において既にのべられており、私が見たためて解釈しなおす必要もないので、見田石介氏の説明を示しておく。

「成は有と無の矛盾なのだから、やがて、この矛盾によって自分自身も破壊され、成ではなくなる、ということです。これは、ずいぶんこじつけです。」

有は、じつは無をふくみ、無は、じつは有をふくんでいる、そういう矛盾だから、有は有であることができないし、無は無であることはできない。そういう矛盾からおこるのは、現実の運動です。生成流転です。ところがヘーゲルは、成は有と無をふくむ矛盾だから、自分を解消して成自身がなくなる、という。こんなことは、ぜったいいえないと思うのです。すべては生成流転するという成の認識を現実にてらしてみると、相対的に安定しているもの、静止しているものが、いくらもあります。それで、現実をとらえるには、成の認識だけでは不十分だということがわかるのです」(同書、七六ページ)。

事物の相対的な安定性、静止性の側面をとらえて、それを思惟のうえに論理的カテゴリーとして反映したものが、定有というカテゴリーであり、成から定有への移行は、事物が絶えず生成消滅していることを反映する成というカテゴリーでは、現実の事物のもつ相対的固定性という表象を説明できないので定有へ移行するのである。したがって、成から定有への移行のやり方は、成という抽象的カテゴリーでは現実の事物のもつ相対的固定性を説明できないので定有という具体的カテゴリーへ移行するやり方である。したがって、成から定有への移行は絶対に現実の事物の歴史的生成を認識のうえで、反映するような移行ではない。だから、「定有は成から生ずる」(ヘーゲル、前掲書、一一八ページ)というようなヘーゲルのいい方は曖昧であり、ヘーゲルの絶対的方法にたいする批判的見地からこのいい方を理解しないと、その神秘的な絶対的方法にひきづりこまれることになる。

ところが、松村氏はさきの引用文で、「あらゆる特定の存在は生成したものである」とか、あるいは、「特定の存在はすべて生成したものである」とかいて、ヘーゲルの成から定有の移行を現実の歴史的生成としてとらえられるのである。論理的移行のなかに現実の歴史的生成を把握する松村氏のこの見解は、論理の歩みと歴史の

歩みを同一視するヘーゲルの絶対的方法につかまっているといわなければならぬ。

しかし、松村氏はまた「有、無、成から定有への移行は具体化する思考過程にはかならない」(前掲書、八六ページ)といい、あるいは、「たんなる成はまだ真理ではない。現実の成のうちには、相対的、一時的に安定な形態が見いだされる」(同前、一〇二ページ)と云って、成から定有への移行を論理的過程として正しくのべてもいるのである。

以上のように松村氏のヘーゲル解釈には正しい見地とヘーゲル主義にとらわれている見地とが混在しているのであって、松村氏の業績に依拠する場合にはこの点に注意することが必要である。<sup>(注)</sup>この点を注意しないことになって、どのような誤りが生まれるかを、次に富森虔児氏の見解をみることによって明らかにしたい。

(注) 松村氏の以上へのべたような弱点については、すでに見田石介氏によって指摘されている。(見田石介「ヘーゲル大論理学研究」第一巻、一一一ページ)私の見解はこの見田石介氏の指摘を敷衍したものにすぎない。

### 3 松村説の経済学への適用

——富森虔児氏の経済学の方法

#### (イ) 論理的矛盾の三形態の混同

富森虔児氏は以上にのべた松村氏の見解をその肯定面も否定面をもあわせて、経済学的認識の方法として適用され、そのうえで見田石介氏の見解を批判されており、一つの典型的な見解となっている。しかも、富森氏の見

解は松村氏の考えの弱点をよりよく示すものともなっている。そこで次に富森氏の見解をとりあげることにする。マルクスが『資本論』の「貨幣の資本への転化」の章でのべている「彼（貨幣）の蝶（資本）への成長は、流通部面で行なわれなければならないし、また流通部面で行なわれてはならない」という論理的矛盾の形式でもって表現されている文章を、富森氏は松村氏の論理的矛盾に関する見解をそのまま適用して解釈され、次のようにいわれる。

「この事態をちょっとみればわかるとおり、ここでは明らかに『同じ主語（彼の蝶への成長）について同じ述語（流通部面で行なわれる・れない）を同じ意味で肯定しかつ否定する』……という認識の状況が生まれているのであり、したがって、これは典型的に『アリストテレスのいう論理的矛盾』……に他ならない。いいかえれば、このような認識においては、二つの認識の間に頭脳内部での闘争がさけられず、その闘争に決着をつけるべき方向で矛盾を解決する何か——この場合は労働力商品——がみつげだされねばならず、その意味で、この『論理的矛盾は、アリストテレスが主としてみたように誤りという面からのみみられるべきではなくて、認識の発展の動力であり、認識もまた抗争を通じて、発展するものである』……とされねばならないのである」（『帝國主義論の根本問題』、一二〇ページ）。

この引用文中の『』の部分は富森氏が松村氏の『ヘーゲルの論理学』から引用されたところであり、引用文中の『』のなかの（ ）の部分は松村氏の著書にはなく富森氏が挿入されたものである。

ところで、第一章2節でものべたことだが、論理的矛盾には三つの形態がある。それは(a)現実の客観的な矛盾を反映する場合に認識がおこしている論理的矛盾、(b)弁証法的叙述過程で認識がどうしてもおこいらざるをえない外

観上の矛盾としての論理的矛盾であり、この場合には(a)の場合とはちがって認識が反映する現実それ自体はすこしも矛盾するものではない。だから、「外観上」の矛盾というのである(第3節<sup>(4)</sup>)のべるように、これがまた二つの形態にわかれる)。それから、もう一つは(c)分析が不十分であることによって生じる論理的混乱、論理の前後撞着としての論理的矛盾である。この種の問題を論じる時には、この論理的矛盾の三つの形態の区別をはっきりとさせておくことが、議論の根本的な本質をなしている。

ところが、この富森氏の『帝国主義論の根本問題』からの引用文では、とりわけ松村氏の文章への富森氏による挿入部分がよく示しているように、富森氏においては論理的矛盾の三つの形態が全く区別されず混同されている。松村氏においては(a)と(b)の形態の論理的矛盾が明確に区分されていないことはすでにのべたが、しかしすくなくとも松村氏は(a)と(b)の両形態の論理的矛盾を意識的に同一視し、混同することはなかった。だが、富森氏においては、(a)の形態での論理的矛盾、すなわち客観的な矛盾が論理的矛盾をおかすかどうかということを考察しているところに、(b)の形態の論理的矛盾を意識的にもちこまれているのであり、松村氏の弱点に輪をかけたものとなっている。この(b)の形態の論理的矛盾はあくまで事実を認識するうえでおちいる論理的矛盾であるが、論理的矛盾の形態で反映される客観的事実それ自体は現実の矛盾ではないのである。「貨幣の資本への転化」章でマルクスがとり扱っていることは貨幣や資本という客観的事実のもつ矛盾ではないのである。資本家が労働者に賃金に対象化されている労働時間を越えて労働させ、剰余価値を含んだ商品を生産し、それを流通過程で販売することによって剰余価値を取得するということは、それ自体は何の矛盾も含まない客観的事実であるにすぎない。(a)の形態の論理的矛盾と(b)の形態の論理的矛盾を区別しないことが富森氏の誤りの第一点である。

第二に、(b)の形態の論理的矛盾と(c)の形態の論理的矛盾を富森氏は区別されていない。松村氏の文章への挿入部分は(b)の形態の論理的矛盾であり、これは(c)の形態の論理的矛盾とは異なるものであるが、ところが富森氏は引用文にある「いいかえれば」という語句のまへの文章では、(b)の形態の論理的矛盾をいっておきながら、それは「いいかえれば」アリストテレスのいう論理的矛盾、すなわち(c)の形態の論理的矛盾であるといわれるわけであるから、(b)の形態の論理的矛盾と(c)の形態の論理的矛盾が全く同一視され混同されてしまっているわけである。この点も松村氏においては意識的にのべられているわけではなく、むしろ松村氏の弱点が富森氏において顕在化したというべき誤りであろう。

第三に、松村氏は(b)の形態の論理的矛盾の意義を認めておられないが、この松村氏の誤りをそのまま富森氏は踏襲されていることが指摘されなければならない。しかし、この点に関する富森氏の誤りは松村氏への批判によって尽されると思うのでここで再検討をすることはしない。松村氏への批判は、見田石介氏によって「論理的矛盾と現実の矛盾」(『見田石介著作集』第一巻所収)や、『見田石介ヘーゲル論理学』(全三巻)のなかで幾たびかおこなわれているので、それを参照されたい。

(四) 単純な分析的方法における認識の発展の動力について

富森氏が松村氏にならって、(c)の形態の論理的矛盾、すなわち「分析の不十分さにより生じる認識上の矛盾」のなかに認識の発展の動力をみられていることは(イ)で引用した文章から明らかであろう。この見地が誤っていることは第一章2節(四)ですでにみたので再び繰り返さないが、この点が認識の発展の動力についての富森氏の見解



の誤りの第一点である。

第二は、第二の形態の論理的矛盾、叙述過程における外観上の矛盾に関する氏の見解から発生するものである。氏はこれについて次のようにいわれる。

「いわゆる『貨幣の資本への転化』という『資本論』の論義は、資本の『何か』をさしあたり抽象的一般において概念化する過程におけるより抽象的な貨幣から資本概念への認識の発展を、表象把握と抽象的前提との関連から生ずる論理的矛盾を動力とする認識の弁証法的発展として示した一つの典型的なものであるといわねばならず、だからこそ、貨幣と労働力商品とのたんなる『合計』でなく、それらを真に『止揚』したものである」としての資本の活きた理解への前提がここで行なわれたとみられるべきものである」(同前、一一〇—一一二ページ)。

ここで氏のいわれている表象把握というのは資本の表象 $G-W-G$ であり、抽象的前提というのは価値法則あるいは商品流通が等価交換の下におこなわれているということ( $W-G-W$ あるいは $G-W-G$ )である。氏が正しいといわれているように、「すでに価値法則が基本的に理解され、したがって商品流通が等価交換の下に行なわれていることがはっきりしている以上、商品流通からは、表象としてつかまれた $G-W-G$ のは、どうしても説明することはできない」(同前、一一〇ページ)のであり、したがって表象把握と抽象的前提とが、いいかえれば新しい経験的事実と既知の理論とが矛盾しているのである。既知の理論で説明できないような新しい事実を知るからこそわれわれは既知の認識に満足しないで新しい認識を獲得しようとするのであって、この意味でこうした矛盾が認識の発展の動力となる。事実を探索する過程においては、こうした矛盾は客観的事実と既知の理論との間の矛盾としてあらわれているが、研究の結果、この表象としての客観的事実が分析されてしまえば、この客観的事実は

人間の思惟によって把握された新しい理論に転化する。表象としてつかまれた客観的事実としてのG—W—G'は剰余価値というカテゴリーに転化する。剰余価値は自己増殖する価値であって、流通過程で詐欺やそれがもつ価値以上に高く売りつけられること等々によっては絶対に生じないものであり、生産過程から生じなければならぬものである。したがって 生産過程で消費することによって剰余価値を創造する労働力商品が発見されなければならぬのである。労働者が売っているのは、古典派経済学の表象に思い浮べられた「労働」ではなく、労働力商品であり、こうして仮象としての表象が理論に転化されるのである。研究過程での分析の結果、事実が分析されてしまえば、次にそれを叙述しなければならぬ。叙述する段階になると、一方では資本主義的生産は商品交換と価値法則を前提とするのであるから、この法則だけからいえることは剰余価値は流通過程を通じて生まれねばならないということではなければならない。ところが、他方では、分析の結果としてすでに知ったように、剰余価値は流通過程では生まれぬのである。この二側面の認識を合わせれば、論理的矛盾になるのであるが、この論理的矛盾それ自体はそれをいくらひねりまわしたところで神秘的な手品でもしなければ、労働力商品という新しい認識を生み出すことはできない。つまり、叙述過程において論理的矛盾という形式でもって表現された認識それ自体からは新しい発見をおこなうことはできないのであり、したがって、この論理的矛盾は認識の発展の動力とはなりえないのである。

ところが、富森氏には以上のことが明確ではなく、氏は「表象把握と抽象的前提との関連から生ずる論理的矛盾を動力とする認識の弁証法的発展」といわれるのである。したがって、認識の発展の動力としての矛盾は論理的(的)矛盾それ自体にあるとされ、「表象把握と抽象的前提」との間にある矛盾ではないといわれているわけ

ある。

そういう考えであるならば、氏のいう論理矛盾を動力とする認識の発展という見解はヘーゲルのいう論理の前進はカテゴリーがその内部にもつ自己矛盾によっておこなわれるという概念の自己展開説とどう違うのか。

氏は入江節次郎氏の見解を批判するなかで次のようにいわれる。

「もともと『範疇それ自体が内包する矛盾の自己展開』なる上向法なるものが、ヘーゲルに発する極めて誤った見地なのであり、抽象から具体への上向をこのように考えること自体が基本的に誤っているのであり、『資本論』体系をこのように考えたとすれば、それは資本論体系の歪曲とならざるをえないというべきであろう」（同前、五〇ページ）。

また氏は同様の趣旨のことを、宇野氏の経済学方法論を批判されながら、繰り返しのべられている。

「概念自身に内在する矛盾（概念……自身は抽象的死物であり、そこに生きた闘争関係としての矛盾を認めることはそもそも不可能であるのだが）に論理展開の動力を与えるという弁証法こそ、周知の通り、実はヘーゲルの弁証法であったのであり、松村一人氏がかつて指摘された如く『ヘーゲルは概念に発展の動力を与えるからこそ、あたかも論理展開が、現実の歴史的展開をあらわすかのよう』（松村、前掲書）な誤った傾向が生まれ、ここにこそヘーゲルの最大の欠陥が認められるべきものであったのである」（同前、一四三ページ）。

松村氏のヘーゲル批判に依拠したこの富森氏の入江氏や宇野氏にたいする批判はそれ自体としては正しいものである。そして、この引用文からみれば、氏のいう論理矛盾はヘーゲルの概念やカテゴリーの自己矛盾とは直接には異っているものであるかのようにみえる。

しかし、概念自身に内在する矛盾というのは認識のうえに反映された論理の矛盾にはかならず、氏が正しくもこの引用文でのべられているように概念自身に内在する矛盾に「生きた闘争関係としての矛盾を認めることが不可能であり」、したがってそれに「論理展開の動力」をみる事ができないとすれば、氏のいう「論理矛盾」のなかにも「認識の発展の動力」をみることはできないのではないのか。ところが、氏は自らの「論理矛盾」のなかには「認識の発展の動力」があるといわれるのであるから、氏は自分で自分を批判して、自らを「ヘーゲルの最大の欠陥」を有するものと認められることになるのであるうか。しかし、氏はこのことを認められないからこそ、ヘーゲルの概念の自己展開説を批判されるのであって、したがって氏は自らの「認識の発展の動力としての論理矛盾」とヘーゲルの「概念内部にある矛盾」とを全く違うものと理解されているわけである。

こういう理解もまた松村氏の見解を踏襲することによって可能となる。すでに第一章2節(二)でのべたように、松村氏がヘーゲルのカテゴリーの内部矛盾による自己運動という見地を批判する場合に、この批判はもっぱらヘーゲルがこじつけによってカテゴリーの移行の必然性を示すというそのやり方にたいする批判、こじつけという自己運動の形式にたいしてむけられることによって生じた批判であって、ヘーゲルの絶対的方法の根本の見地にむけられた批判ではなかった。つまり、ヘーゲルの概念の自己展開説は、その表面的な形式では「こじつけ」という特殊な形態で認識内部の矛盾があらわされており、そしてヘーゲルはこじつけたその矛盾によって概念が自己運動するかのように説明する。松村氏の批判はもっぱらこの点にのみむけられているのである。この点の批判はそれ自体としては合理的なことであり、今日、依然として富森氏が松村氏に依拠して批判されている入江氏や宇野氏などのヘーゲル主義の見地にたいする批判として大切なことである。しかし、この松村氏のヘーゲル批判

は特殊的で狭いものである。ヘーゲルの「こじつけ」はその絶対的方法から生じるのであり、それは認識過程が現実を生む転倒した観念論であって、現実はその規定する認識から生まれるのであるから認識の展開こそ現実の展開であり、したがって認識は何か外部の力を借りることなく自己運動しなければならないというものである。だから、認識が何ものかの力を借りること、すなわち所与としての客観的事実を分析することを「外的反省」であるといつてヘーゲルは批難するのである。だから、ヘーゲルにおいては認識はそれ自体として発展の動力をその内部にもっているのである。「こじつけ」はこうしたヘーゲルの絶対的方法の一つのあらわれにすぎないのであり、その本質は認識がその内的矛盾によって発展するというものである。松村氏の批判はこのヘーゲルの本質に迫っていないのである。

富森氏が、「認識の発展の動力としての論理矛盾」とヘーゲルの「概念内部の矛盾」を区別されるだけで、前者が後者の表われであるという両者の同一性をつかんでおられないのは、松村氏と同じくヘーゲルの絶対的方法への批判が不徹底であるからであり、氏はヘーゲルの「概念内部の矛盾」を「こじつけ」というヘーゲルの絶対的方法のあらわれにおいてのみ理解されているのである。だから、氏は例えば、貨幣の資本への転化の叙述においてのべられている認識上の矛盾は、「こじつけ」としての認識上の矛盾、概念内部の矛盾ではないと区別して考えられているのである。なるほど、貨幣の資本への転化の叙述においてのべられている矛盾は、「こじつけ」としての認識上の矛盾でないことは明らかである。しかし、貨幣の資本への転化においてのべられている矛盾は、剰余価値は流通過程から生まれなければならないと同時に生まれてはならないということであるが、このような叙述をいくら眺めてひねくりまわしたところで、このことだけは絶対に新しい認識としての労働力商品とい

うカテゴリーは生まれてこない。それどころか、すでにスミスの二元的価値論を論じた際にのべたように、このような叙述過程における認識上の矛盾に落ちいるためには、すでに「抽象的前提と表象把握」の矛盾によって表象が分析されて労働力商品というカテゴリーが思惟のうえに獲得されていなければならないのである。

以上のことから、富森氏という「論理矛盾」もヘーゲルのいう「概念の内部にある矛盾」も形式は異っているけれども、それらがともに認識の発展の動力としてみられているという側面からみれば、その本質においては富森氏の見地とヘーゲル主義の見地は同一なのである。

(2) この貨幣の資本への転化における論理の移行は以上にみたように資本の表象を分析することによっておこなわれたのであり、ここにみられるのは単純な分析・総合の方法であった。この分析的方法が適用されて、資本の概念が獲得され、貨幣から資本への移行がおこなわれたのであるが、ここで分析的方法が適用されているのは、貨幣と資本が相互に前提となりあい、相互に含蓄しあっているカテゴリーではないからである。なぜなら、資本概念は貨幣概念がなければ理解できないが、貨幣概念は資本概念を前提としなくても理解できるのである。資本は貨幣を論理的前提としなければ理解できない経済的形態規定であるが、貨幣は資本を論理的に前提しなくても理解できる経済的形態規定であり、この二つの経済的形態規定は次元を異にするのである。したがって、貨幣から資本への移行は必然性のない移行であり、この移行はそれ自体においては発生的展開ではない。

この点からみても、貨幣の資本への転化についてのマルクスの説明は有機的に結合し、相互に前提しあって存在しているような客観的対象を認識の上に反映する場合にとられている弁証法的方法ではない。したがって、貨

幣の資本への転化の説明にみられる認識上の矛盾は、たんに叙述のうえでの矛盾にすぎないのである。

ところが、富森氏はこの場合、すなわち分析している対象が相互に前提しあっていない、論理的に含蓄しあっていない場合と、分析している対象が相互に前提となりあっており、論理的に前提しあっている場合とを全く区別しておられない。貨幣の資本への転化はこの前者であり、価値概念から価値形態への移行、単純な価値形態から貨幣形態への移行、相対的価値形態と等価形態の説明、あるいは資本一般から独占資本への移行などはこの後者である。富森氏は、この二つを区別されておられないし、さらに次にみるように、この後者の論理的移行は概念の自己展開であると考えておられる。そして、氏は前者と後者を区別されないものであるから、前者の場合の叙述の方法を後者の場合と同一視し、そのことによって後者の場合について氏が考えておられることを前者にもちこまれることになるのである。

だから、次に検討すべきことは、後者の場合、すなわち分析の対象が相互に有機的に相互に前提しあい含蓄しあっている場合には、果して富森氏のようにそうした客観的对象を把握する論理の進展は論理的矛盾によるのかどうかということを考察してみよう。

(イ) 弁証法的方法における認識の発展の動力について

(1) 富森氏は、価値概念から価値形態への移行、価値形態から貨幣形態への価値形態の展開、あるいは資本一般から独占資本へと論理的上昇をする時の叙述の展開は、論理矛盾を動力としておこなわれると考えておられ、

さらにこのことと貨幣の資本への転化の叙述において表現されている認識上の矛盾とを同一視されている。

そこで、氏がマルクスの価値形態論のなかに「発見」される「論理矛盾を契機とする認識の発展」について考察してみよう。氏は次のようにいわれる。

「われわれが上にみた『貨幣の資本への転化』における論理矛盾を契機とする認識の発展という関連が、同様に価値形態論の展開においても基本的に認めうるというてよいだろう。

すなわち『諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない』（『資本論』第一巻第一分冊、六四ページ）とされる『価値のこの現象形態に帰る』べき向上は、まず、すでにそれまでの価値の追跡によって、商品価値の基本が明らかにされたにもかかわらず『商品の価値対象性には一分子も自然素材ははいっていない。それゆえ、ある一つの商品をどんなにいじくりまわしてみても、価値物としては相変わらずつかまえてやうがない』（同右）ということのはらむ、認識上の一つの不安定によって押し上げられるというべきであろう」（同前、一二二ページ）。

この引用文の「認識上の一つの不安定」という意味は、次のようにいいかえられている。

「商品の商品として商品間関係から切りはなしてみる以上、価値対象性はつかみどころがなく、その限りでいえば、商品価値（主語）は抽象的人間労働の対象化（述語）である（肯定）にもかかわらず、なおそうでない（否定）といえる余地がのこされることになり、そこに明らかに認識上の論理矛盾が未解決にのこされることになり」（同前、一二二ページ）。

（注）この引用文にある「いいうる」という富森氏の表現はおかしなものである。この可能性の形態での表現は、いいえ



「ないかもしれない」という逆の可能性を含んでいる（『ヘーゲル論理学入門』、有斐閣新書、第Ⅱ部6「現実性」を参照されたい）。

現実的なものの存在の必然性と変化の必然性を証明し、それを思惟のうえに反映することを任務とする科学がどうしてこのような可能性（そういういいうる可能性は、そういういえない可能性を含み、要するにまだ何も規定しない）の形態で表現されねばならないのか。「いいうる」ではなく、「いわなければならぬ」とどうして氏は表現されないであろう。「商品価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、なおそうでない」ということが「いいうる」であれば、この表現は論理的矛盾の形式としては不十分である。マルクスが「貨幣の資本の転化」章でおこなっている「剰余価値は流通過程から生まれなければならないと同時に、生まれてはならない」という表現で現わされている認識上の矛盾は、必ずこのように表現しなければならないのであって、こう「いいうる」ではない。

これらの引用文でのべられていることは価値概念から価値形態への論理的移行についてであるが、このことについての氏の見解は次の二つの点から検討されなければならない。第一は、A、氏が価値形態を展開するために、氏の価値概念が「商品価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、なおそうではない」ものとしてのべられていることである。第二は、B、価値概念から価値形態への移行においてみられる弁証法的方法を氏がどのようなものと理解されているかということである。

まずAについて。本稿八三ページのあとの方の引用文でいわれている「商品価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、なおそうではない」というのは、一体どういう意味か。富森氏のこのいい方をいいかえれば、商品価値の実体は抽象的人間の労働であると同時に、そうではないということになる。価値とは「何か」ということ、すなわち価値概念はそれがその一側面においては実体としての抽象的人間労働の結晶であり、その対象化されたものであるということをおいなければならない。

『資本論』で、マルクスはあらゆる労働生産物が同時に商品でもある資本主義社会を前提として出発し、そうした社会の商品を価値と使用価値の二要因に分析し、それぞれの何かを明らかにしたのちに、価値形態論の叙述にはいるのであるが、商品の価値とは何かをいうためには、再びそれを分析して、その実体が抽象的人間労働であるということをいわなければならない。富森氏は降旗節雄氏と宇野弘藏氏を批判して、対象の科学的把握のためには、まず研究している対象そのものの何かをいわねばならないと一定の留保（この留保が意味することについては後述する）をおいたうえでのべられている。

「われわれとしても降旗節雄氏のいわれるような『そのもの△何か▽を前提として△いかにして▽を解明するのではなく、逆に△いかにして▽という論理的展開をとおして△何か▽を解明する』（降旗節雄『資本論体系の研究』青木書店、一一六ページ）という方法には、全く納得できないことを卒直に認めないわけにはいかない。…『いかにして』を追求する場合にその追求の対象になっているものの『何か』であるかを全然わからずに、これを行なうことは、一種の神がかり的なものでも期待せぬ限り、不可能である」（同前、一一二ページ）。

ここでは明らかに富森氏は科学はまず対象の「何か」をいわなければならないとのべられているのである。そうすると、富森氏のいう「商品価値は抽象的人間労働の対象化であると同時に、そうではない」、あるいは、「価値の実体は抽象的人間の労働であると同時に、そうではない」というのは、対象の「何か」をいっていることになるのか。絶対にいっていることにはならない。なぜなら、この否定の方すなわち「商品価値は抽象的人間労働の対象化ではない」の方は全く現実を反映しておらず誤った認識である。だから、この富森氏の論理矛盾は正しい認識と誤った認識を両方合わせもつ松村氏がいうアリストテレスの論理的矛盾である。したがって、この論理

的矛盾、認識上の矛盾としてあらわされる判断は、この矛盾する両項のそれぞれのどちらが現実的反映としての真実であるかを確定していないわけであって、この判断はまだ対象の「何か」をいっていないのである。

ところで、ここですこし注意しておく、見田石介氏が現実の矛盾は論理的矛盾でもってしか反映されないという場合に、この論理的矛盾の両項はそれぞれ客観的現実を正しく反映しているのである。「交換過程は個人的であって同時に、一般的社会的である（個人的でない）」といって、交換過程の矛盾（現実の矛盾）を論理的矛盾でもってマルクスや見田石介氏が表現する場合、この論理的矛盾の一方の項である「交換過程は個人的である」ということは、客観的現実を正しく反映している。他方の項である「交換過程は個人的でない（一般的社会的である）」ということも、客観的現実を正しく反映している。だからこそ、この論理的矛盾は対象の「何か」ということを正しく反映しているのであり、対象が現実的な矛盾であるからこそ、人間の認識はこの矛盾する対象を論理的矛盾の形式でもってしか反映できないのである。そして、現実の矛盾を反映する論理的矛盾はこういう形式でもって現実を反映し、対象の「何か」ということについてべているのである。

だから、富森氏のいう論理的矛盾というのは、見田石介氏のいう現実の矛盾を反映する論理的矛盾ではなく、それは対象の「何か」をいわないものである。富森氏は対象の「何か」をのべないで論理を展開する降旗氏や野氏を批判して、論理展開のはじめに、展開する当のものの「何か」をいわねばならないといわれながらも、氏自身、対象の「何か」をいわれないのである。

ところが、氏は一方では「商品価値が追跡され、商品価値の基本が明らかにされた」といっておられるのであるから、氏においては価値形態を展開する段になると、価値概念の「何か」が見失われてしまうことになってい

るのである。こういう氏の論理は首尾一貫しないアリストテレスの論理的矛盾であって、ここからは何ものも生まれてこないことは、すでにのべたとおりである。氏のこういう誤りの根本的な原因はマルクスの価値形態論の論理展開の動力をヘーゲル主義的に認識上の矛盾にもとめられるからであるが、これを次に検討してみよう。

(2) B について。富森氏が A でみたように考えられるのは第二のこと (B)、すなわち価値概念から価値形態への移行においてみられる弁証法的方法についての氏の誤った理解から生じており、この誤りは後述するように、二つの側面において指摘されなければならない。

氏が引用されている「価値対象性はつかみどころがなく」というマルクスの文章は、『資本論』第一巻第一章第三節「価値形態または交換価値」の最初にでてくる語句であるが、この第三節の課題は、第一にすでに獲得している価値概念から(単純な)価値形態への移行を説明すること、第二に単純な価値形態から貨幣形態まで、価値形態を展開することである。富森氏の引用文が含んでいる、第三節の「単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」にはいるまでの『資本論』の文章は、「価値形態論」のこの二つの課題をマルクスが説明しているところである。

そして、富森氏が引用された語句を含むパラグラフでマルクスがのべているのは、この第一の課題とその内容についてであり、それはこうである。マルクスは商品を使用価値と交換価値に分析し、まず使用価値の「何か」をいい、次に交換価値の本質として価値をとらえ、価値を抽象的人間労働という実体規定と私的所有にもとづく相互的な他人関係という経済的形態規定に分析し、そのちにそれらを総合して価値の「何か」をいい、こうし

て使用価値と価値のそれぞれの「何か」をいって両規定の総合として商品の「何か」すなわち商品概念を説明しているのである。ここまでではすでに第一章の第一節と第二節ですでに明らかにされたことである。このようにすでに『資本論』第一章第一、二節で価値が自然的なものではなく社会的なものであることが示されている。したがって価値が社会関係であるのだから、ある一つの商品をいくら眺めまわしたとしてもその価値対象性はつかめないということである。価値が社会関係であるのだから、商品はその価値を自分自身で表現することはできないのであって、商品と商品の社会関係においてのみ表現されるのである。同じことだが、抽象的人間労働が対象化されている商品の価値対象性は商品と商品の社会関係のうちにか現われないのであり、それは商品の交換関係すなわち価値の現象形態のもとでのみ把握されるのであって、したがってそれを把握するためには価値概念から再び——ここで「再び」というのは最初に価値概念を獲得するために交換価値の分析から出発したからである——価値の現象形態、価値形態に帰らねばならないのである。

以上のことからいえることは、第一に、「価値概念にたいする価値形態の第一形態の概念内容は、けっして第一形態そのものを表象に思いうかべることなしに、価値概念の論理的内容だけから、みちびき出されたものでなく、すべて第一形態の表象を分析することによって得られたものだということである」（『見田石介著作集』第四巻、一五五ページ）。

第二に、「社会的労働としての抽象的労働の対象化としてとらえられた価値概念と、一商品の価値の他の商品の使用価値による表現としてとらえられた価値形態とのあいだには、後者が前者を含蓄するだけでなく、前者も後者を含蓄していて、商品価値の本性が外的に表現せられるとすれば——交換のためにはこの表現は必然である

が——そうした価値形態をとる以外にはないし、また価値形態は、価値の現われ以外の何ものでもない、ことが示されている」(傍点は筆者——同前、一五九—一六〇ページ)。

富森氏はこの第一点と第二点をとくに誤り解されているのである。

第一点について。マルクスは「価値対象性はつかみどころがなく」という富森氏の引用句を含む第三節の最初の文章においても、また第三節「価値形態論」のどこにおいても、第一、二節で明らかにされた「価値は社会関係であり、抽象的人間労働が対象化されたものである」という規定を、富森氏の「価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、そうではない」というような規定にいかえてはいない。マルクスは、「われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない」(資本論 第一巻第一分冊、六四ページ)とか、あるいは「すべての価値形態の秘密は、この単純な価値形態のうちひそんでいる。それゆえ、この価値形態の分析には固有な困難がある」(同前、六五ページ)といって、価値形態の「何か」が、X量の商品A || Y量の商品B (20 エルのリンネル11着の上衣) という単純な交換価値あるいは価値形態の表象の分析によってえられるというのである。そして、単純な価値形態の表象を分析して価値概念から価値形態への移行の必然性を示している。相対的価値形態にある、抽象的人間労働の対象化としての商品価値の本性は、それが社会関係である以上、自分自身のもって自分自身を表現できないのであり、回り道をして等価形態にある他の一商品の使用価値でもって自分自身を表現するのである。等価形態にある商品の使用価値はこのような価値関係の内部では相対的価値形態にある商品の価値をうつつしだす価値鏡であり、人間の欲望の対象としての使用価値という意味を失っているのである。概念的に示せばこうしたが、単純な価値形態の概念の内容として示されているのであるが、これは徹底的に

価値形態の表象を分析することによって与えられており、分析によって価値形態の概念の内容を示すことが、同時に価値概念から価値形態への移行となっているのである。したがって、富森氏のいうように、価値概念の矛盾、認識上の論理矛盾が、「価値対象性をその現象形態において把握しなすこと」（『帝国主義論の根本問題』、一二三ページ）を要請するといつて、価値概念から価値形態へ移行するような、こじつけ的なことを、マルクスはおこなっていないのである。

このように表象を分析しなければ移行はできないということ、すなわち実体規定と経済的形態規定の総合として抽象的な価値概念では、表象として思い浮べられている諸商品の交換関係としてあらわれる価値形態やその発展した形態である貨幣形態を説明できないので、この表象と既知の抽象的理論の矛盾が論理展開の動力となつて、価値概念から価値形態への移行および単純な価値形態から貨幣形態への移行がおこなわれるのであるということである。そして、その移行は、価値形態のそれぞれの表象を徹底的に分析することによっておこなわれている。

しかし、価値概念から単純な価値形態へ移行する時に用いられている方法は、後述するように単純な分析的方法ではなくて、弁証法的方法であるのだが、ここで確認しておくべきことは、やはりこの弁証法においても、マルクスが実際にやっているように、またヘーゲルがその神秘的な絶対的方法の裏でこっそりと、時に公然とおこなっているように、その方法の基礎には表象の分析があり、分析の方法があるということである。

(3) 次の問題は、前述した見田石介氏のいわゆる第二の点（本稿八八ページの見田石介氏からの引用文）である。この問題は、抽象的人間労働に私的所有にもとづく相互的他人関係という経済的形態規定をつけ加えて価値

概念を獲得した場合のように、移行の必然性のない——なぜなら、抽象的人間労働というカテゴリーは価値を含蓄していないし価値に移行する必然性はない——単純な分析的・総合的方法にもとづく移行と、価値概念と価値形態の場合のように、あるいは相対的価値形態と等価形態、剰余価値と地代、資本一般と独占資本等々の場合のように、相互に前提しあい相互に含蓄しあっているカテゴリーの間の移行がどう違うのかということである。すでに、第一点で、弁証法的方法にもとづく移行の場合もそれが徹底した分析、すなわち分析的方法をその基礎としているということを示したのであり、弁証法的方法にもとづく移行と分析的方法にもとづく移行との同一性を示したのであるから、次の問題はこの両者の区別である。

富森氏はこの両者が異なるということをおぼろげながら感じられている。それは一方で「価値が基本的に明らかにされた」といわれながら、他方では「価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、そうでない」という表現や、「商品の商品として商品間関係から切りはなして見る以上、価値対象性はつかみどころがなく」という表現に示されている。ここで示されていることは、実は本質と現象の関係にあるもの、一般と特殊の関係にあるものは相互に前提しあい相互に含蓄しあっているのであるから、本質の説明は同時に現象を説明することによって示されねばならず、逆に現象の説明は本質を説明することによって示されねばならないということである（一般と特殊の場合も同様）のだが、氏はこういう関係にあるものは唯物論的には一体どう分析すればよいのかということについて考えておられないし、また事態がこういう関係にあることからヘーゲルの絶対的方法が生みだされ、神秘的な概念の自己展開説が生じたのであるということについても無自覚である。だから、氏はヘーゲルに追随することになる。また、宇野理論に依拠する降旗氏は、方法は概念の自己展開によるヘーゲル主義的弁



証法の一つだけであるという先験的にきめてかかった見地から、分析的方法と弁証法的方法の二つの方法の存在を主張される見田石介氏の方法的見地(もちろん、単純に二つの方法を区別するのではなく、弁証法的方法は徹底した分析的方法であること、他方で真的分析的方法は弁証法的方法にしたがって展開する場合にのみおこなわれうるし、またおこなわれなければならないという両者の同一性の関係を氏はとらえられている)を批判されるのであるが、富森氏はこの批判を容認されることにもなるのである(同前、一二六ページ)。

したがって、価値概念から価値形態への移行のさいに用いられている弁証法的方法がいかなるものかを次に検討しなければならぬのである。

弁証法的方法は分析的方法を基礎とすることはすでにのべたので、次の問題は弁証法的方法は相互的な分析であるということである。この問題は、(2)(本稿八五ページ)でのべた富森氏の「一定の留保」と関係しているので、まずこの「一定の留保」について考察してみよう。

「前もって明らかにされるべき『何か』は、実は、不完全で借りのあるものとならざるをえず、その意味で『いかにして』を通してこそ、この『何か』が真に明らかになってくる一面はわすれられてはならない」(同前、一二二ページ)。

「厳密に言えば、前もって明らかにされる『そのもの(∧何か∨)』は、対象の真の把握が、そのものの歴史的定在性を対象に即して把握するところで出来上がることを考えれば、なお、不完全で借りのある『何か』であることは注意されねばならず、そうしたことについても見田氏がすでに注意されていることに留意しておきたい」

(同前、一二二ページ)。

前述したように、氏は対象の「何か」をいわないで論理展開をおこなう降旗氏や宇野氏を批判され、論理展開はまず対象の「何か」をいわなければならぬと考えておられる。このこと自体は正しいのであるが、しかし氏は一定の留保をつけられて、この主張をおこなわれるのである。それは、対象の「何か」をいったとしても、そのことは見田氏のいうように「不完全で借りのある『何か』」であるという留保をつけたうえでの「何か」である。しかし、見田石介氏が注意されている「論理的な借りをもっている概念」というのは、ここで富森氏の理解されているものとは全く異なるものである。見田石介氏のいう「論理的な借りのある概念」というのは大略次のようなものである。

その諸関係がすべて相互前提関係にある資本主義的生産様式を把握する科学的叙述方法は、抽象的カテゴリーから具体的カテゴリーへとすすむ叙述方法の原則にしたがっておこなわれるものである。しかし、抽象的カテゴリーは具体的カテゴリーの論理的前提としてそれに先行するのであるが、抽象的カテゴリーは前進するのにちなる具体的カテゴリーに到達してはじめて基礎づけられ完全なものとなる。しかし逆に、両者が相互前提関係にあるという点からみれば、具体的カテゴリーは抽象的カテゴリーの前提としてそれに先行しなければならないのである。何故こうなるかといえば、分析する当の客観的対象の諸側面が相互に前提しあっているからである。商品の価値形態に先行して与えられる抽象的な価値概念は具体的な商品においては価値形態と切り離されないものとして存在し、それらは相互前提する本質と現象として統一して商品の一側面をなしているのである。人間の認識はこのような統一である客観的实在を縦横に分析してそれを把握するのであって、これが認識の能動性でありまた客観においては切り離しがたく統一している客観の諸側面を分析によって切り離すところに客観の弁証法と

は異なる認識の弁証法が生じるのである。こういう相互に含蓄しい、相互に前提しあっている対象の分析は単純な分析的方法ではとらえられないのであり、ここに独自のものであり、分析的方法と区別される弁証法的方法の必然性があるわけである。この弁証法的方法の特色は何か。見田氏は価値概念と価値形態との間の関係を例にとりながら次のようにいう。

「これまでの分析(単純な分析的方法のこと——筆者)とちがっているのは、たんに具体的なものの分析によってそこに抽象的なものが見出されただけでなく、反対に抽象的なもの——価値概念のうちに価値形態の含蓄されていることが見出されている点にあるだけである。

すなわち二つのものあいだで、一方的でなく、相互的に分析がなされたこと、あるいは二つのものの同一関係が分析されたことが、それである。

事態そのものがそうした同一性の関係、相互含蓄の関係をもっており、必然的な関係にあるのだから、その分析が完全になされるかぎり、分析はそうした一方的なものではなく、相互的なものとならざるをえないのである。しかしこれは分析以外のどんな過程でもないのは、明らかである」(『見田石介著作集』第四卷、一六〇ページ)。

この相互的な分析こそ、唯物論的弁証法の特徴であり、相互的な分析が『資本論』の弁証法的方法の基礎であることを見田氏はその諸著作の随所においてのべている。

たとえば、地代は剰余価値の形態であるがこの地代を0とみて、まず抽象的カテゴリーである剰余価値の「何か」を明らかにする。この場合、地代が0の資本主義的生産様式はありえないのであるから、地代を捨象した剰余価値は不完全な概念であり、「論理的な借りのある概念」なのである。したがって、この「論理的な借りのあ

る概念」が完全な概念となるためには、不完全な剰余価値概念から地代を説明することであり、分析によって地代の「何か」をいった時に、それは同時に完全な剰余価値概念を与えることになる。論理の前進は同時に後退であるということである（以上の例は、「宇野弘藏氏の価値論」第六節——『見田石介著作集第五卷』所収論文——を参照されたい）。

このように、たとえば、剰余価値は相互に前提し含蓄しあっている地代を捨象して説明されているかぎりにおいてはまだ「論理的に借りのある」概念であり、あるいは、価値概念が価値形態を捨象して説明されているかぎりにおいては、「論理的に借りのある」概念であるということである。以上のことを富森氏は理解されておられないものだから、氏においては、「論理的に借りのある」ということは、たとえば、「剰余価値は不払い労働の結晶であると同時にない」とか、「商品価値は抽象的人間労働の対象化であるにもかかわらず、なおそうでない」ということになる。これは要するに前述したように、剰余価値や商品価値の「何か」をいわないことであるが、マルクスはこんなことを『資本論』のどこにおいてもいっていない。地代を捨象しておいて、剰余価値は不払い労働の結晶であるといい、価値形態を捨象しておいて価値概念は抽象的人間労働の対象化であるというのである。科学的叙述はまず対象の「何か」をいわねばならないのである。

弁証法的方法における分析が相互に前提しあい含蓄しあっている客観的对象の相互的になされる分析であるということを氏は全く理解されていない。だから、氏は見田氏のいう「論理的に借りのある」概念について、一方では注意されなければならないと肯定的にのべられながら（富森前掲書、一一一ページ）、他方では、「こうした価値概念のうちですでに価値形態のこうあるべきが含蓄されているのである」（『見田石介著作集』第四卷、一五七ページ）

ジ)という見田氏の「論理的な借りのある」概念について、否定的に、そうではない(富森前掲書、一二六ページ)といわれ、全く首尾一貫していない。そして、結局、「先行する価値概念には価値の抽象的人間労働による規定自体が十分には確立していなかったことという認識上の限界」(同前)に価値概念から価値形態への移行の動力をみい出され、価値概念から価値形態への移行が、対象の相互的な分析であるという唯物論的立場を放棄されるのである。「歴史過程から相対的に独自なものとしての認識過程の真の弁証法的過程の内容」(同前)を見田氏は理解していないと氏はいうのであるが、この批判は富森氏に妥当するものであって、認識過程の独自性とその弁証法的性格を分析的方法にもとづいて説明した点にこそ見田石介氏の不朽の功績があるのである。

(4) 以上のように、相互に含蓄しあい相互に前提しあっている客観的対象を把握する場合に用いられる弁証法的方法もやはり分析的方法を基礎とし、徹底した分析を特色とするのであるが、この場合の認識の発展の動力もやはり、単純な分析・総合の方法と同様に既知の抽象的理論と具体的な表象との間の矛盾であるとだけいっておけばよいのであろうか。「論理的に借りのある」概念といっても、これには二種類あって、貨幣と資本の場合には、資本は貨幣なしには理解できないのであるが、貨幣は資本なしに理解できる——『資本論』のような論理展開においてということであって、具体的な経済学史のうえでこういうことがなしえたという意味ではない——のであり、単純な分析的方法においては「論理的な借り」は一方的である。そして、貨幣という表象に対しては貨幣というカテゴリーがあり、資本という表象に対しては資本というカテゴリーがあって、一方の表象からえられた貨幣というカテゴリーでは、他方の資本の表象は説明できないからこの矛盾が動力となって資本の分析にむかうのであり、この場合には二つの表象とそれに対応した二つのカテゴリーがあって、その一方だけが他方に対し

て「論理的に借り」をもっているわけである。

これに対して、価値概念と価値形態、相対的価値形態と等価形態等々の場合には、同じ一つの事態あるいは表象を理解するうえで一方の理解は他方の理解を前提とし、他方の理解は一方の理解を前提とするのであり、この場合には「論理的な借り」は相互的である。見田氏はこの後者について次のようにいっている。

「こうした意味で、すべて必然的につながりあっている具体的な事態を理解し、あるいは説明する過程では、カテゴリーはすべて論理的に借りをもち、『前進の衝動』をもっており、この過程そのものはこの衝動による発展の過程となっている。

認識過程のこうした性質を認識するところに、一方ではヘーゲルの概念の観念論——概念そのものが前進の衝動をもち、生きた現実のように自己発展するという——がうまれており、他方では、論理＝歴史説が真実のものであるようにとられる一つの理由がある」（見田前掲書、一七五ページ）。

ここで、見田氏が「前進の衝動」と括弧つきでのべられているように、この「前進の衝動」は外見上のものである。必然的につながりあっている具体的な事態を諸側面に分析しその諸側面の「何か」をいった場合に、それを「論理的に借りのある」概念であるというのは、すでに全体を相互的に分析して一方の側面の「何か」が他方の側面の「何か」によって補足されなければならないということを知っているからこそであって、もしこの相互的な分析が不十分で他の側面が認識されていないとすれば、一方の側面が「論理的に借りがある」かどうかもわからないし、他方の側面がわからないのであるから、たとえ「前進の衝動」をもったとしてもどこに行くかわからないのである。したがって認識は発展しようがないのである。それだけではない。ある事態が論理的矛盾の

形式で表現されようとされまいと、事態の一方の側面は他方の側面と相互に前提しあっているのであるから、他方の側面が分析によってつかまれていないということは、一方の側面の分析の不十分さを現わしているのである。だから、論理の前進はすでに両側面の分析が完全に終ってこそなされるのである。相互に前提しあっている両側面の統一としての同じ一つの具体的な事態あるいは表象に対しては一方の側面の認識だけでは不十分であり、それだけの認識では客観的な事態を説明できないから、他方の側面の認識へと向うのであり、この意味でやはり認識の発展は、一側面の認識だけでは具体的な事態を説明できないところからおこなわれるのである。このように分析的方法においても、弁証法においても認識の発展の動力は基本的に同じである。

富森氏はこうしたことをほとんど理解されていないわけであり、したがって氏の見地は見田氏の先の引用文でいわれている「ヘーゲルの概念の観念論」的見地に立っているといわなければならないであろう。

その他に、富森氏の『帝国主義論の根本問題』には、単純な価値形態から貨幣形態への論理的移行を価値形態と相対的価値形態の両極の「論理的矛盾」にもとめたりするような見解が存在するが、本稿は「価値形態論」を論じることが主題としているわけではないのであるから、この場合にも認識の発展の動力を両極の矛盾にみい出す氏の方法は誤っており、このことは今までのべたことから明らかであると思われるので、このことについての富森氏の見解についてはこれ以上立ち回らない。

ところで、このように経済学の論文において、哲学的、論理的な松村一人氏の見解を検討したのは、たんに経済学的論文も方法的見地を反省しながら、書かれなければならないという一般的理由だけではなく、以上にみたように、松村説の誤りがさらに拡大されて富森氏の経済学の論文にあらわれており、解釈学的な経済学、経済

学史の研究を合理化する方法として利用されているためであった。そして、こうした検討からいえることは、具体的な経済学の研究においてはいうまでもないことであるが経済学史の研究においても、研究を進展させ、認識を進展させて現実の法則的理解へと進むためには、事実の分析とそのイメージを与えることが基本であるということである。